

学 位 論 文 題 名

『後撰和歌集』の諸本研究

学位論文内容の要旨

本論文は『後撰和歌集』諸本の本文を比較することによりその祖形態を遡求復元しようとするものである。

本論文は、1 所用の諸本、2 巻一～巻十の異文対立、3 巻十一～巻二十の異文対立、の3章及び「全本文(巻一～巻十)」「全本文(巻十一～巻二十)」からなり、総字数約320000字である。

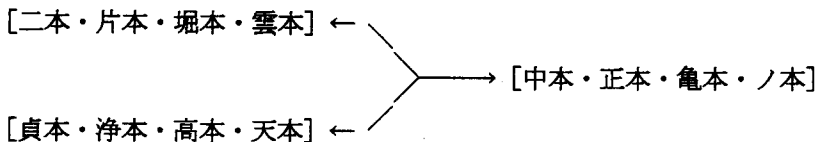
本論文所用の諸本12本とその先行研究での位置付けは次の通りである。

	先行研究での分類
二本	二荒山神社本
片本	加納氏旧蔵片仮名本
堀本	書陵部伝堀河具世筆本
雲本	大阪青山短期大学松平出雲守旧蔵本
正本	天理図書館伝正徹筆本
中本	京都大学中院家旧蔵本
亀本	武田祐吉旧蔵伝龜山天皇筆本
ノ本	ノートルダム清心女子大学本
貞本	大山寺貞応二年書写本
浄本	尊経閣浄弁本
高本	高松宮本
天本	冷泉時雨亭藤原定家天福二年筆本

このうち、二本と片本とは巻十一以降を欠いているので、12本の総てについて比較できるのは巻一～巻十である。この部分の諸本の本文は

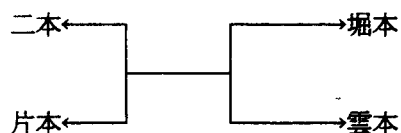
二本・片本	⇔	堀本・雲本・中本・正本・亀本・ノ本・貞本・浄本・高本・天本	243例
堀本・雲本	⇔	二本・片本・中本・正本・亀本・ノ本・貞本・浄本・高本・天本	76例
二本・片本・堀本・雲本	⇔	中本・正本・亀本・ノ本・貞本・浄本・高本・天本	67例
二本・片本・堀本	⇔	雲本・中本・正本・亀本・ノ本・貞本・浄本・高本・天本	65例
二本・堀本	⇔	片本・雲本・中本・正本・亀本・ノ本・貞本・浄本・高本・天本	32例
二本・片本・雲本	⇔	堀本・中本・正本・亀本・ノ本・貞本・浄本・高本・天本	31例
二本・片本・堀本・雲本・正本・中本・正本・ノ本	⇔	貞本・浄本・高本・天本	25例
二本・片本・堀本・雲本・貞本・浄本・高本・天本	⇔	中本・正本・亀本・ノ本	24例
二本・片本・堀本・雲本・中本・貞本・浄本・高本・天本	⇔	正本・亀本・ノ本	18例
片本・堀本	⇔	二本・雲本・中本・正本・亀本・ノ本・貞本・浄本・高本・天本	15例

の対立が顕著あり、ここから

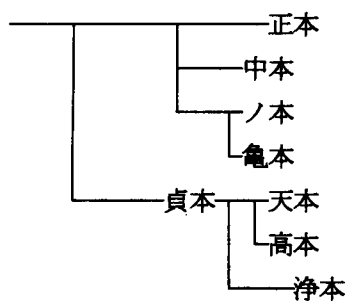


の3グループの対立関係が明らかとなる。

二本等のグループについては次の対立が顕著である。



正本等のグループ・及び貞本等のグループについては次の関係を想定できる。ただし、これらの諸本は雲本系の本文を継承しつつ、二本・片本系による校訂・改変が行われているため、それぞれに複層的な混交本文を形作っている。



巻十一～巻二十については、堀本・雲本・正本・中本・亀本・ノ本・貞本・天本の8本の異文対立(歌本文についてののみ集計)から巻一～巻十と同じ傾向を読み取ることができる。

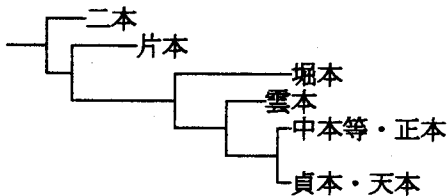
学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宮 澤 俊 雅
副 査 教 授 身 崎 壽
副 査 教 授 安 西 眞

学 位 論 文 題 名

『後撰和歌集』の諸本研究

本論文で提示されている諸本の本文の比較分析から、下のような系統関係を構築することは容易である。



ただし二本等のグループと正本等のグループが順当につながらず、共通異文の分布に矛盾状態が見られるところなどから、定家が雲本系に基づきつつ、二本・片本系によって本文を校訂・遡源したであろうことが伺われる。今後、『後撰和歌集』の本文遡源には、巻一～十は、二本・片本・堀本・雲本の4本の系統関係・親疎関係を明らかにすることが肝要である。また巻十一以後については、二本・片本を欠くため、堀本・雲本の2本による本文遡源を行い、併せて定家本類諸本の本文中の雲本とは異なるもの（＝二本・片本系由来の校訂本文である可能性のあるもの）を参看しつつ堀本・雲本の2本による本文遡源を行うことが可能となろう。

本論文の成果として以上の他に、

- 1 「浄本・高本は定家自筆本の臨写コピーである」との識語伝承が確認され、この2本を本文研究上、貞本・天本に吸収解消すべきことが明らかになったこと
- 2 先行研究で定家本とは別の群として分類されている正本が定家本群に含まれることが明らかになったこと
- 3 定家本が本文遡源を目指した校訂本であることが明らかになり、定家によって校訂されている古今和歌集・伊勢物語・源氏物語等の諸本研究についても新しい研究方向の可能性のあることを示唆していること

等が挙げられる。

本論文は『後撰和歌集』の諸本の親疎関係を確定し、善本文への遡源の端緒を見いだしている。この意味で本論文は『後撰和歌集』研究・和歌史研究を進展させるものである。審査担当者は全員一致して柳田健一氏に博士(文学)の学位を授与するのが至当であるとの結論に達した。